

平成22年信州医学雑誌編集委員長交代にあたって

石 田 文 宏

中山 淳前編集委員長から本年1月に編集委員長を引き継ぎ、信州医学雑誌の編集の任にあたるようになってから1年が経過した。

平成21年から本誌に英文論文の掲載が認められるようになり、また、医学博士の学位審査論文として審査を受けられる論文として信州大学医学部で認定されたことが本年の論文投稿状況と掲載内容に大きく影響を与えた。具体的には英文論文の投稿が明らかに増加し、また、掲載された論文のうち2編は実際に学位論文としての審査対象となり医学博士の学位取得に至っていた。論文査読にあたってはこれまで以上に、十分な科学性、倫理性、医学上の妥当性を担保する必要がある、信州医学会会員および医学部医学科・保健学科の教授の多くの方々に編集委員として査読をお願いした。その中で専門分野を考慮し、投稿論文のpeer reviewを心がけた。査読いただいた先生方にはご多忙の中、迅速な査読にご協力いただきこの場を借りて深謝申し上げます。論文投稿から一回目の著者への応答までは最短8日となっており、また、査読者から厳正ではあるが建設的なコメントをいただくことで投稿者のreviseに向けての意欲と具体的な改善につながったと信じている。一方、査読の結果rejectとなった論文もあり一定の水準は維持できたと考える。

症例報告としての論文投稿、掲載はこれまでと同様で概ね推移したようである。エビデンス重視の時代であってでも症例報告の重要性は論を待たない。初期研修医をはじめ、若手医学者の研鑽の場としてもご活用い

ただければ幸いである。

また、時宜よく、58巻3号の巻頭言では藤本圭作教授に信州医学雑誌にかかる上記の経緯の詳細もご解説いただいている。

医学論文および医学雑誌も時代とともに変化してきている。中山前編集委員長の時に投稿規程の中での倫理規定を整備し、掲載論文はJ-STAGEで公開されることとなった。さらには、創刊号からの学術記事が信州大学機関リポジトリに登録されている。情報化時代における本誌の社会貢献への一端である。

今後の課題としては、直近では利益双反の開示がある。論文の透明性を確保する上で不可欠になると考えられるので次期小泉知展編集委員長に引き継いでいきたい。また、特に英文論文を世界に向けて発信するには掲載論文がMEDLINEで検索可能となることが肝要である。未だ準備段階であるが、投稿意欲にも大きく寄与しうると考えるので実現に向けての努力の積み重ねが重要と考える。

スクールジャーナルとしてのアイデンティティを維持しつつ、より高いレベルの学術雑誌となるため、一方では学生諸君をはじめとする若手医療者への啓発や登竜門としての教育的要素でも発展できるよう、今後も更なる会員の方々のご支援とご理解をお願いして、小泉編集委員長へバトンを渡すことにしたい。

最後に、円滑な発刊のため、投稿者との対応や編集の一切に心を砕いていただいた事務局の矢羽さん、三澤さんに深謝申し上げます。 (平成22年12月)